

「聞かれる祈り」

使徒3：1～11

イントロ：

1. 私の体験：経営者を対象としたセミナー 「祈りとは空中に向かって大声を出すことか」
2. 祈りとは神との対話
3. 祈りには効果がある。

驚くべき実話： 「クレイ」 5月8日の例話 「祈りの力を発見した教会」

アリゾナ州フェニックスの教会： 160人を電話帳から選び、80人のために90日間祈った。
69人が訪問を歓迎し、45人が家に迎えた。祈らなかった80人の中では、たった1人。

4. 祈りのストレス
 - (1) 答が返ってこない。
 - (2) 祈ったことと逆のことが起こる。
 - (3) 祈りの力への疑い。

TS： 使徒3：1～11から、聞かれる祈りについて学ぶ。

I. 同情心から出た祈りは、時には危険なことがある。

1. ペテロとヨハネは午後3時の祈りの時間に宮に上った（9時、12時、3時）。
2. 2人で行動。
3. 「美しの門」での情景。異邦人の庭から婦人の庭に入るための門（ニカノルの門）
4. 生まれつき足のきかない男。施しによって生活。
5. 最高のロケーション。エルサレム中で知らない者はいない。
6. 神がその出会いを用意された。奉仕の機会、神の摂理。
7. その男は、施しを求めた。もしそれに答えていたら、それで終わっていた。
8. 同情心から出た祈りは危険である。執りなしの祈り手は注意する必要がある。
 - (1) 憐れみの心はよいものであるが、それが効果的な祈りを妨げる場合もある。
 - (2) ハーベスト・タイムでも執りなしの祈りをするが、答を指定している場合が多い。
 - (3) 親の祈りは、時には危険である。
 - (4) そういう祈りは、神の計画に敵対する祈りである。

II. 神の御心と調和した祈りは、効果的である。

1. ペテロの答え。「私たちを見なさい」
2. 男は、大いに期待する。
3. 「金銀は私にはない」。初代教会の指導者たちは、イスカリオテのユダから教訓を学ぶ。
4. 「しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい」
5. 御心との調和
 - (1) イエスの御名の権威（使徒4：12）。
 - (2) 「しかし」の世界、超自然的な世界を知っている。
 - (3) 180度の方向転換をした人だけが知る世界
 - (4) バプテスマ： ①主イエスとの一体化。
②古いものとの決別。不信仰なユダヤ人との分離。
 - (5) イエス・キリストの権威の代行者となった。
6. 男の右手を取って歩かせた。
7. 神の計画こそが祈りの根拠である。それを知る知識と感性が必要。

III. 真の執りなし手は、危険に対する備えをすべきである。

1. ペテロは、この男の究極的な願いに答えた。
2. ペテロの2回目の説教。
3. イエスの十字架と復活の証言。
4. ユダヤ人の罪を糾弾。
5. 「悔い改め」とは、イエスに関する認識を変えること。
 - (1) 個人的な悔い改めは、個人的な救いをもたらす。
 - (2) 民族的な悔い改めは、主イエスの再臨をもたらす。
6. 2人は、サンヘドリンに引かれていく。迫害の始まり。
7. その迫害が、ユダヤでの伝道、サマリヤでの伝道、そして異邦人伝道につながる。
8. 「私を用いてください」と祈る人は、覚悟して祈る必要がある。
9. 時代の風潮に反する生き方。その人には分かっている。聖霊には分かっている。

結論

1. 同情心や、人間的な期待感だけで祈ってはならない。
2. 神の計画を感じ取る感性を持ち、それに即して祈るべきである。
3. 危険に対する備えをして祈るべきである。